産経新聞　朝刊　和歌山版　2021年4月4日

くじら日記
太地町立博物館から

森浦湾の迷いイルカ②

正体解明への手掛かりつかむ

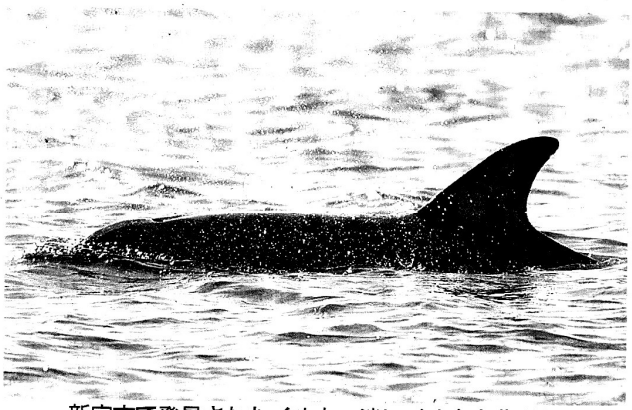
小型鯨類飼育施設を備える太地町森浦湾に、２０１９（令和元）年11月30日から突如姿を見せるようになった種不明の「迷いイルカ」。その種判別の手掛かりとなる便や表皮探しが始まりました。しかし、いつどこに現れるか見当のつかないイルカから、それらを採取することがいかに困難か。しかも、イルカの便は水溶性で、タイミングは一瞬です。

機会がないまま、幾日かたちました。しかし、その間に観察された迷いイルカの行動はどれも興味深いものでした。人や船に興味を示し、接近することもしばしばありました。また、湾内の飼育イルカと生け簀網越しにコミュニケーションをとるようにもなりました。同じリズムで並泳する同調行動や、口を開けたり、威嚇音を出したりする威圧行動、体の一部をこするラビングと呼ばれる社会行動などです。

そして、採餌行動にも驚かされました。湾内に生息するマアジやブリ、ボラなどを生け簀の網際に追い込み、行き場をなくしたところを捕らえていたのです。普通、イルカは集団で、連携して餌生物を捕食します。しかし、迷いイルカは1頭で、地の利を生かして餌を捕らえていたのです。

森浦湾内でボラを捕らえる迷いイルカ＝昨年２月

この頃から、町外からもイルカの発見情報が寄せられるようになりました。２０２０（令和２）年１月２日には那智勝浦町で、２月９日には新宮市で、いずれも漁港内です。撮影された写真の中には、頭や背中、背びれが鮮明に写っているものもありました。


新宮市で発見されたイルカ。迷いイルカと背びれの特徴が一致した＝昨年２月（沼野正博氏撮影）

自然界における鯨類の個体識別調査では、体の模様や傷痕などの自然標識が目印として役立っています。早速、町外のイルカと迷いイルカの写真を見比べると、背びれ後縁にある2カ所の傷痕の位置と形が一致し、同一個体であることがわかりました。どうやら迷いイルカは、森浦湾から約10キロ離れた沿岸も生活圏としているようです。悠々自適の暮らしの断片が見えてきました。

いよいよ便採取のチャンスがやってきました。湾内を船で走行中、数メートル先で迷いイルカが排泄したのです。粘性が強い便で、溶けるのも遅いです。たまたまウエットスーツに着替えていたスタッフは海に飛び込み、少し潜ったと思うと、見事漂う便を手ですくい取りました。迷いイルカの正体解明に、一歩近づきました。

（太地町立くじらの博物館副館長　稲森大樹）

◇

今回から掲載日を原則、月の第1日曜日にします。